



No.66 2003. 11
株よかネット

NETWORK

個族化社会のネットワーク形成①

青壮年の個族化が少子化・高齢化社会の原因になっている

——さらに10年後の個族化・少子化・高齢化は

どうなっているだろうか——

公園のシンボルをみんなで作ろう

～輪を広げる編～

第73回地域ゼミ “大人と子どもの居場所”を考える

見・聞・食

井穴刺絡（せいけつしらく）治療取穴法の威力に感動

～健康支援ネット第3回セミナー報告～

30年前から始まった産山村田尻地区の民宿村

～口コミでじわじわと人気に～

近況

宗像みあれ祭り “見” “聞” 記

李政美（いじょんみ）さんの居酒屋コンサート

～ここにも追っかけおばさん族がいた～

着物とともに季節を楽しむ

本・BOOKS

変わる家族 変わる食卓

2

5

8

10

11

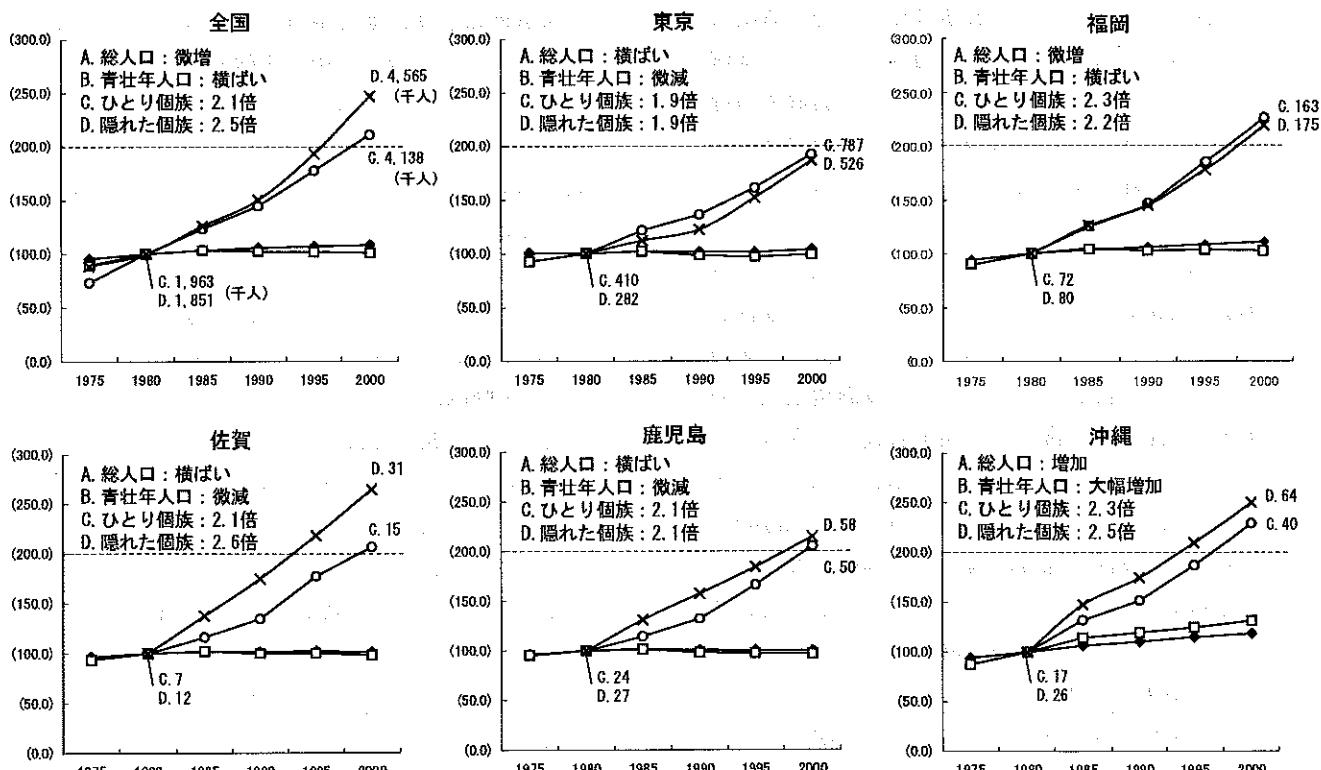
13

14

15

●九州の個族化は東京より加速している。(本文2頁に関連記事)

青壮年ひとり個族と隠れた個族（30歳～54歳）の年次推移



資料：国勢調査

*青壮年のひとり暮らし個族=一般世帯の30～54歳の単独世帯員数、青壮年の隠れた個族=30～54歳の2人以上世帯内未婚者数

*1980年を100とした指標

*都府県別では、詳細集計においても年齢別（5歳階級）のひとり暮らし個族と隠れた個族の値がないため、80年からの推移になっている。

◆総人口 ○青壮年人口
□青壮年のひとり暮らし個族 ×青壮年の隠れた個族

青壯年の個族化が少子化・高齢化社会の原因になっている

——さらに10年後の個族化・少子化・高齢化はどうなっているだろうか——

糸乘 貞喜

●豊かさの中の個族化

私たちは今、地縁や血縁が弱くなつたために、それらの縁を頼りに暮らすという日常が壊れて、何時孤立し孤独に暮らさざるをえない日々に追込まれるか、分からぬ時代に生きている。それは一人暮らしになることであつたり、心の支えがつながらない家庭で過ごすことであつたりする。つまり今の時代は、地縁や血縁を中心にして肩を寄せ合つて生きる社会から、形の上でも、心のあり方からも、個人個人が自立して生きていかざるをえない社会になりつつある。それを「個族化社会」と呼んで考えてみたい。

今までの私たちは、豊かさを求めて励んできた。その結果、世界でも有数の豊かな社会を築き上げることはできた。モノの豊かさを効率的に生み出すために、私たちが選んだ方法は、人間も効率的に配置することであった。そのことも、世界史上もっとも早いといわれるスピードで、農山村から都市へ、大量の人々を移動させるという地域改革として、成し遂げた。その過程で血縁や地縁は薄れていき、モノの量産システム追及のために、会社の中の縁さえも弱くならざるをえなくなっている。

従来の社会では、多くの人々はタテ型の血縁や地縁で強固にカバーされていた。しかし工業社会では、人々は自由で、移動の可能な人材・労働力となつた。それは、大量生産・大量消費型社会の中で、それが勝手に家族を形成し、生きていいくことでもあった。そのこと自体は、私たちにとって非常にすばらしいことでもあった。血縁のうるささから逃れ、地縁の義務から解放され、自分で豊かな暮らしを享受することができたのだ。これらについては、古くから指摘されていたことで、工業社会の一つのすばらしさである。

ところが、私たちは現在、二つの問題に直面しているように思う。一つは高品質なモノを大量生産するというシステムが、日本から他のアジアの国に移って行きつつある。そのことは私たちが、

工業社会の次の情報産業社会というシステムの中で、モノ以外の「知」を生産し、販売し、消費して豊かさを感じなければならなくなつてゐることを示している。もう一つは、タテ型の血縁や地縁システムで保護されない部分を、ヨコ型のネットワークで補強し、支えていかなければならぬということである。

●映画・文学作品からみた個族化

個族化社会という言葉には二つの側面がある。ひとつはフィジカルな意味の「ひとりで暮らす」という意味であり、もうひとつはメンタルな意味の「精神的なつながりがなく孤立している」という状態である。この問題を生き生きと示す映画がある。「東京物語」と「息子」である。前者は昭和28年（1953年）の製作で、現在世界的に最も注目されていてる小津安二郎監督の作品である。後者は、1991年、山田洋次監督作品。

「東京物語」は、地元尾道から上京した老夫婦（笠智衆・東山千栄子）が、血縁の息子や娘の家で快く迎えられず、血縁のない戦死した息子の嫁（原節子）にもてなされる。落ち着かぬ東京から、尾道に帰郷する途中で老妻が病気になり、帰郷後亡くなるというプロットである。

一人残された、年老いた夫が海を見つめる最後のシーンは有名である。家族の崩壊や老い、孤独などを描いたものとして高く評価されている。この映画は多くのことを示唆しているが、現代の高齢問題の視点とはおもむきが異なる。当時は日本人全体があわただしい社会に生きていたので、「この一人の老人を誰が介護するのか」などとは受け止められなかった。しかし、今あらためてビデオを見ると、老妻の葬儀のあと、東京や大阪へ帰っていく血縁の長男や長女などの動きは、「年寄りにかかわっているヒマはない」といったあわただしい雰囲気である。今ならこのあとが気になるところである。「息子」の場合は、まさに介護が問題になつてゐる。この映画が製作された1991年には、

表一 同世代人口に占める個族総数(全国:ひとり暮らし個族+隠れた個族) (千人)

	1975年	1980年	1985年	1990年	1995年	2000年
30~54歳	3,079 (100)	3,814 (124)	4,751 (154)	5,621 (183)	7,060 (229)	8,703 (283)
(30~34歳)	1,276 (100)	1,684 (132)	1,777 (139)	1,857 (146)	2,386 (187)	3,115 (244)
55歳以上	4,742 (100)	6,401 (135)	8,440 (178)	10,985 (232)	13,687 (289)	16,852 (355)
※25~29歳	4,177 (100)	3,564 (85)	3,551 (85)	4,231 (101)	5,065 (121)	6,043 (145)

資料:国勢調査

注1:世帯主の年齢からみた世帯員数を用いている。

高齢問題が社会的なテーマになっていた。

このあらすじは、妻を亡くした老父が山間の農家に住んでおり、タバコなどを作っている。そこへ、老母の一周年ということで、長男・長女の家族、そしてまだ就職先も決まっていない次男が帰ってくる。最近、近隣の老人がプロパンガス事故で死んだという話も出て、誰がどこで老父を引き取るかということが問題になる。一流の勤め先をもち、家族の中の出世頭である長男は、千葉の方の高層マンションの11階の家を買い、六畳の部屋とテレビを用意している。戦友会のために上京した老父を呼んで2~3日暮らしてみると、マンションの一室だけの暮らしにはおさまらない。

小説の「風の行方」(佐藤愛子著、毎日新聞社刊)は現代家族の個族化を示している。「ママはいなくなつた。おじいちゃんも遠くへ行ってしまった。なぜこの家は急にこんな風にバラバラになってしまったのだろう?」と、一人っ子の少年が回想するところから始まる。少年を取りまく4人の家族が、突然それぞれの、それなりに納得がいく理由で別れだし、それぞれが主体性があるかのような自己主張を始めて、バラバラになっていく話である。

祖母は、長年家族に尽くしてきただけだという思いをもっており、夫に離婚を迫る。夫(祖父)はその希望を受け入れて、自分は岩手の山奥の無住寺に住みつきひとり暮らしを始める。彼は教師の出身であり、そこでもう一度本来の教師の夢を思い、塾をやろうとするが、その山里にはほとんど子供はない。

息子の父母もそれぞれ自立するといって別居し極めて平均的な五人家族は、四人家族に変貌する。少年はいじめにあった子をかばったことから、自分もいじめにあうが、ひとりぼっちの

健気な戦いを続ける。

これは、便利で豊かな現代社会と、自我の確立のようなものを探求する性(さが)に挟み撃ちされた、現代のバラバラ物語である。タテ型システムの基礎を受け持っていた家族が崩壊し、地域社会や学校からも、昔のシステムは追放されかかっている。

もうひとつ、「変わる家族 変わる食卓」(岩村暢子著、勁草書房刊)という本で、食卓という場が、「核家族さえも内部で個化」しているという報告である。この本によると、食卓は共通の場ではあっても、個別に思い思いの食べものを、それぞれの時間に摂る場となっていて、一緒に使う場ではなくなっている。

もしそうならば、居間とか食卓は、個化した家族のメンバーが集散するための、駅のコンコースのようなものになっているといえよう。あるいは家の機能をそのように見る、「コンコース家族化」しているといえるかもしれない(この本の内容については15頁の「本・BOOKS」欄に)。

●進展する青壮年の個族化

個族総数を示すと(表一参照)、30~34歳層では1975年に13.8%だったものが、2000年には35.5%になっている。同世代人口の1/3が個族となっており、その比率は今後も増加しそうな勢いである。青壮年世代の個族総数(30~54歳)でも、同期間に7.9%から19.8%に、ほぼ3倍増になっている。青壮年についてみると、1985~90年頃からの急増が目立っている。

私たちが十数年前に「個族」ということを考え始めたときは、高齢者の問題としての「個族」であった。もちろんこれは大きな社会問題ではあるが、現在、高齢者については一応介護保険というシステムができている。しかし、青壮年の個族化や就業不安定化については、あまり問題にされて

<タテ型システムの弱まり>

- 老・壮・青の世代間やそれぞれの同世代の間の、知的な相互交流が欠けやすくなっている。
- ①親戚づきあいは、数が減り、距離も遠くなっている。
 - ②兄弟姉妹も人数が減って、住んでいるところも遠く離れている。
 - ③農村集落では、世帯数や家族人数が減ったこととも関連して、昔のような集落のしきたりが保てなくなっている。
 - ④さらに農村集落では、現代の仕組み（工業社会、核家族）から外れたために、結婚をしない未婚青壯年が増えている。
 - ⑤都市周辺部の集落では、在来の居住者と新規移住者の関係がうまくいかず、自治会などの集落区への加入者が減るなど、コミュニティが損なわれている。
 - ⑥都市内でも、人口の減少と老齢化のために、祭りなどの行事の維持が困難になっている。
 - ⑦新しい住宅地でも、町内会などへの加入者が減っている。
 - ⑧企業でも、年功序列制度が崩れて、年俸制が増えている。
 - ⑨と同時に、会社人間は評価されなくなり、タテ型の命令ではなく、自己責任で仕事を成し遂げることが要求されだしている。

いない。それに近いデータとして、大学卒の無業率の増大（2000～2002年では30%を超えている。パート含む：学校基本調査）、若年有業者のうちのパート・アルバイト比率の急増（25～29歳層で20年間に、357千人から792千人へと2.22倍になっている：就業構造基本調査）がある。

社会全体でみると、1990年代の後半に労働力人口（15歳以上の就業者と完全失業者）が減少し始めた（日本の総人口はまだ増えている）。その減少している労働力人口に対する就業比率が減っている。働く人の数は二重の意味で減少している。青年にとって、組織の中で働くというつながりが減っているので、社会とのつながりは薄くなっていると見られる。つまり、安定的な就業でなく、短期間で転々と変わっていく中では、強固なネットワークを築きにくくと考えられるのである。

孤立しやすい人々が増加する一方で、上記のような、全ての人々を包んでいたタテ型システムが弱まっていることによって、老・壮・青の世代間やそれぞれの同世代の間の、知的な相互交流が欠けやすくなっている。昔、地域社会の若衆宿の

表-2 沖縄県の人口と個族の推移 (千人)

	1980	2000	増減
沖縄県総人口	1,015 (100.0)	1,309 (118.4)	204
青壮年人口 (30～34歳)	345 (100.0)	453 (131.3)	108
青壮年	17 (100.0)	40 (229.2)	23
ひとり暮らし	26 (100.0)	64 (260.2)	38
隠れた個族	137 (55歳以上)	311 (193.9)	174
高齢人口			

資料：国勢調査

ような仕組みが受け持っていた「三つのセイ（生＝生きるための仕事の技術を身につける、政＝大人として地域社会のまつりごとへ参加する知識を得る、性＝好きな伴侶を得て次の世代を育てる知恵）」に対する教育機能が失われてきている。この仕組みは、明治以降青年団として組み替えられたが、工業化・都市化の中で若者が都市へ転出し、役割は果たせなかった。

●地域による個族化のちがい

各地域ごとの比較をしてみたい（表紙参照）。ほとんど共通している特徴は、①人口はほとんど変化していない、②青壮年人口はヨコバイないしは微減、③青壮年のひとり暮らしは2倍ぐらいになっている、④青壮年の隠れた個族は2～3倍ぐらいになっている、⑤55歳以上人口も2倍ぐらいになっており、高齢ひとり暮らしと、夫婦のみもそれぞれ2～3倍になっていることである。ということは、この裏側には⑥青少年（21歳以下）人口の大幅減があることになる。

少し例外はある（表-2参照）。沖縄は人口が1980年から2000年の20年間に18%増えている。青壮年人口もそれ以上（31%）増えている。しかし青壮年のひとり暮らしは2.3倍、隠れた個族も2.5倍になっている。

ここまでデータで不思議なことが言える。総人口や青壮年人口がほとんど変わっていないのに、青壮年個族や高齢者が急増しているということは、どこが減っているのかという疑問が起こる。

そのことを沖縄の例で説明してみる。

総人口は204千人増であるのに、青壮年と高齢人口が $108+174=282$ 千人の増加となり、約80千人の差が出ている。ということは、29歳未満の層でそれだけ減っているわけである。沖縄のように総人口が増えているところでも青少年人口の減少

は著しい。まして、総人口がヨコバイや微減の県などは、一層大幅に青少年人口の減少が起きていることになる。

このことが10年後にどんな状況をもたらすのであろうか。20~29歳までの層は、第2ベビーブーム世代を含んでいる。10年後はこの層は30歳以上になる。

●個族がネットワークしやすくなるために

現代は、社会参加の教育が高校や大学に受け継がれているかのように見られている。だが、表面はともかく、実態としては高校や大学においてではなく就職後の企業によって、社会人としての職や仕事をする技能、結婚の世話などが行われてきている。

しかし社会が個族化することによって、企業自体がそのような役割を果たせなくなり、また若者がその企業にさえ加わる率が低下しているという問題が生じている。青壮年が個族化する中で、ネットワークしやすくなるには、「オセッカイ的な手段」と「サポート的な世話」が必要となっている。

オセッカイ的な手段というのは、社会人として出ていく前の、高校や大学というタテ型システムの時期に、ヨコ型ネットワークに加わるための訓練として行うべき「現代若衆宿」のようなものである。サポート的な世話というのは、社会人になって以後孤立しそうになったときに、社会へのつながりを求めやすくするヨコ型のサポートを行うものであり、それを「場力」や「ムラオサ力」などと呼ぶことにしたい。

これらの動きは、一部に見られはじめている。

公園のシンボルをみんなで作ろう ～輪を広げる編～

伊藤 聰

●住民と行政のグループでシンボルを考える

新しい公園のシンボルをみんなで考えて、住民の手で作ろう、そして完成後の管理も自分たちでやろうという取り組みを福岡県稲築町で進めている。これを広めていくためにシンポジウムを開いたので、そのいきさつを含めて報告したい。

場所は役場のすぐ近くにある稲築公園で、山上

前者では、子どもへ社会のルールを身につけさせるための夏期実習塾として行われていたり、後者としては、伝統の祭りの継続のためや、ボランティア活動の拠点として現れている。このような動きを社会的に評価することによってモチベーションを高めやすくすることが必要であり、さらに活動が継続するために民間のボランティアが取り組む場合、その費用について経費を認めるというようなインセンティブが必要である。

「個族化社会のネットワーク形成」はNIRAの研究助成を受けたものである。今回はそのうちのスマリーに当たる部分を抜粋した。次号以降にも、データ編からの抜粋、アンケートやネットワークのことなどを掲載する予定である。

人口という指標は、言うまでもなく地域計画の基本指標である。個族も少ない方がいいにちがいない。10年、15年後を見据えた地域計画、各県計画の中でぜひこのテーマを考えてほしいと思っている。

しかし、この各都道府県のデータは紙面の都合で報告書にも掲載していない。興味があつて御入り用の方はご一報いただきたい。FAXサービスでも考えます。

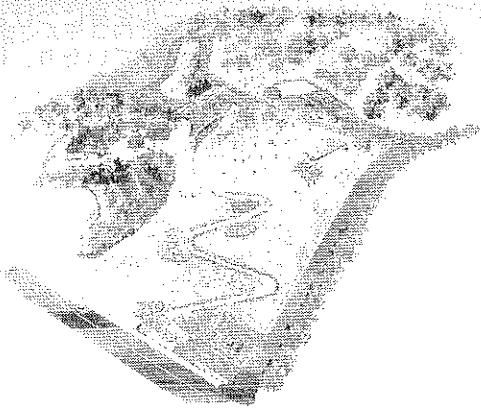
また、この研究の過程でいろいろな資料を見たり、データをつくりアンケートを行うなど、いろいろなことを考えた。それに興味があつて議論をぶつけたい方も、御連絡をください。

(いのり さだよし)

憶良の歌碑などがあり、桜の名所にもなっている。そのすぐ横に病院の移転跡地があり、少し小高くなっている。そこを公園として拡張しようという計画で、既に造成工事に入っている。

公園全体の計画自体は別の専門業者が担当しており、我々と住民と行政職員のグループ「元気にさせ隊」はそのうちのシンボルづくりを考えている。シンボルとは何かというと、ひとつは日時計、もうひとつは花壇である。

日時計は、みんなで作り上げたものが後々形として残っていくもの、楽しいオブジェとして考えた。それもただ見るだけの日時計ではなく、自分



公園のイメージ図

が台の真ん中に立って自分の影が時間の目盛りを指すという「かけぼうし日時計」を考えている。もうひとつは、作り続けていくもの、いつまでも関わり合っていくものとして、花壇を作ることにした。

●公園づくり「を」または「に」かたろう

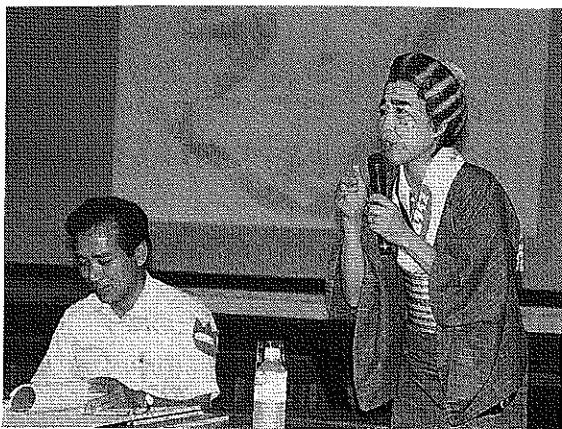
シンポジウムは、公園シンボルづくりを実際に進めて行くにはもっと仲間を増やすこと、賛同者を増やすことが必要だということで開催した。「公園づくりかたろう会」と題して、夏休みの終わりの8月30日（土）を行った。「かたろう会」は『語ろう』と『かたろう』（参加しよう、加わろうという意味の方言）を掛けた言葉だ。

シンポジウムは、参考事例として宮田町の「犬鳴川みどりの会」の報告、次に関係者や専門家とちょっと変わった（？）住民代表によるパネルディスカッション、そして体験コーナーとしてのモザイクタイルづくりを行った。

●住民が公園管理をしている「犬鳴川みどりの会」

事例報告していただいた「犬鳴川みどりの会」は、同じ筑豊地域で一足先に住民グループで犬鳴川河川公園の自主管理を行っている。犬鳴川河川公園は宮田町の中心部付近にあり、犬鳴川の堤防約850mの区間を整備した公園で、花壇やトイレ、東屋などがある。公園を住民が管理することの目的も、産炭地としての背景も、稻築町の状況とほとんど同じで、先進事例として実に参考になった。会長の笹栗氏からの報告の一部を紹介する。

- ・犬鳴川みどりの会ははじめは役場からの呼びかけで、地域の町内会長、老人会、その他住民代表などが集まった。来年で10周年を迎える。
- ・当初の呼びかけで会員は約600名になったが、名前だけで参加しない人が多く、通信費もかさ



会場を沸かせた「梅ばあちゃん」

んだので絞り込んだ。現在は、作業に参加する正会員174名、機関誌が配布される準会員103名の計277名となっている。

- ・会費は事務作業の簡素化のため、入会費500円のみで年会費は取っていない。
- ・10年の間に会員が高齢化し、草取り作業で膝が痛いなど、作業に影響が出始めた。しかし、公民館のサークルなどから20～30名の作業への協力があり、助かっている。
- ・近くの農業高校（現在は総合高校）に花の苗を育ててもらったり、作業に参加してもらったりしている。
- ・犬のウンは絶えない。役場は何でも禁止にするのは良くないということだが、個人的には犬の散歩は禁止がよかつたと思う。
- ・会員に一級建築士があり、藤棚のパーゴラを設計してもらった。
- ・トイレのペーパーの補充は、地域の女性が毎日来て掃除と一緒にしている。トイレは汚くなる前にきれいにしておかなければならない、とみんなが意識することが大切。
- ・川の生き物調査、川下り、たこあげ、芋煮会など、みんなが楽しめるイベントも行っている。別の機会にうかがった話だが、町からみどりの会への補助は年間120万円、使途は公園管理費と広報作成費が大半を占めている。管理費は、シルバー人材センター等に頼めば年間500万円はする、と言われたそうだ。これとは別に、町の予算で花の苗や肥料等が年間60万円程度かかっている。

●「私の公園」という気持ちで

続いて行ったパネルディスカッションは、パネラーとして犬鳴川みどりの会の笹栗氏のほか、元気にさかせ隊の会長、役場の公園担当係、公園づ



デザインに性格が出るモザイクタイルづくり

くりや住民参加の専門家、そして特別ゲストの住民代表として「梅ばあちゃん」、コーディネーターは初挑戦の私ということで始まった。

公園づくりについて良く知らない人に対する情報提供という面もあったため、公園計画の概要説明やシンボルの説明にやや時間を費やしたが、その他は以下のような話があった。

- ・「犬鳴川みどりの会」には役場の人も多く参加していて、行政と住民の距離が近くなつた、役場に行きやすくなつた感じがある。
 - ・子どもたちの未来を築くという考えがまちづくりにつながる。
 - ・学校の授業に絡めると大勢集まるが、地域で呼びかけると毎週違う人が参加したりする。もし少ない人数でも時間をかけなければできあがるので、根気強くやっていけばいい。
 - ・草刈りはできなくても芋煮会の準備をしたり、いろんな役割を果たす人がいる。様々な参加やサポートによって活動していくことが必要。
 - ・レクリエーションやクリスマスなど、日頃の楽しみの中に公園が位置づけられ、イベントなどと連動して利用するといい。
 - ・自然にやさしい、土に戻るような材料を使い、リユース、リサイクルしながら常に更新していくような公園がいいのではないか。
 - ・みんなで作るというよりも、私が作る、私の公園という気持ちで、自分の庭のように関わって欲しい。
 - ・経験上、芝の手入れは大変。花壇も年中花を咲かせておこうとすると、水やりも心配だ。
 - ・体が健康でなくなつても、行きたいと思えるような公園にして欲しい。
- 特別ゲストの「梅ばあちゃん」、実は30代の保

<モザイクタイルの作り方>

○台板の上にタイルを並べる

- ・台となる板の上に、タイル片を好きなデザインに並べていく。

○タイルを台板に貼る

- ・タイルが少なければひとつずつ接着剤で貼つてもよい。
- ・タイル数が多いものなどは上から薄い紙を貼つて裏返し、板を取つてタイルの裏面に接着剤を塗る。板を戻して接着し、再び裏返して表の紙をはがす。

○目地を埋める

- ・モルタルを練つて、目地にへらで埋め込んでいく。
- ・ある程度乾いたら、タイル表面の余分なモルタルを塗れたスポンジで落とす。
- ・完全に乾いたら乾いた布でタイルを磨き、出来上がり。

健士さんが扮している一種のキャラクターなのだが、これが高齢者や女性の気持ちを代弁していて（しかも相当元気に、方言丸出して）、観客に受けも良く場が盛り上がつた。こういう芸のできる人がいるというのも、まちづくりにとっては貴重な人材だ。

●最後は楽しくモザイクタイルづくり

かけぼうし日時計には、みんなで壁画を作ろうという部分がある。壁画はモザイクタイルで作成することを考えているのだが、これを少しみんなで体験してもらおうと、パネルディスカッションの後に企画した。

壁画のデザインはまだ検討中なので、実際に使うものを作るわけではなく、10cm角の板にその場で各自自由なデザインを考えて作つてもらった。モザイクの材料には、市販の1cm角のアートモザイクタイル、内装用のタイルを割つて作ったクラッシュタイル、それにビーズやおはじきなども使つた。

作り方の手順は表通りで、材料があれば難しいことはない。デザインも大ざっぱな人、細かい人、色とりどりの人、シンプルな人と作った人の性格が出て、見ていて面白い。子どもからお年寄りまで楽しめるので、人集めのイベントとしてはなかなかいい。

稲築公園の拡張部分は、国道沿いでもあり町内でもよく目につくところにある。ここがきれいに整備され、管理されているかどうかは町のイメー

ジにも影響する。住民と行政の協働のシンボルとして作っていきたいし、公園づくりが住民のコミュニティ活性化につながるような活動としていきたい。公園は来年の春にオープン（とりあえずの完成）の予定である。それまでに仲間を増やして、輪を広げていけるように進めていきたい。

（いとう さとし）

第73回地域ゼミ

“大人と子どもの居場所”を考える

本田 正明

孤立化しやすい個族が、社会へのつながりを求めるやすくする「居場所」の存在はますます必要になっていると思う。前号でも、“学生の居場所づくり”を行ったチャドさんの取り組みを書いたが、今回は彼の指導教官であり、さらに学術的に居場所について研究を行っている南先生（九州大学心理学教授）に“大人と子どもの居場所”についてお話を伺ったので、その概要を紹介したい。

●場所と生き方は密接に関係している

環境心理学では、“環境が人をつくる”ということが言われる。また“人は環境を選ぶ。環境を変える”ということも言われている。子ども時代は環境を選べないので、その環境から受ける影響が大きい。

子どもの居場所の問題は、中学生くらいからの問題として大きく取り扱われるようになっている。中学生とか高校生という青年期がどうして居場所の問題と重なってくるかというと、小学校まではみんな地域の小学校に半強制的に通う。しかし、中学生ぐらいになると選択ができるようになるからだ。場所と生き方は密接に関係している。

居場所をどうみるかということで、4年間ほど居場所研究会というのをやった。心理学とか精神科、教育学、建築などの異分野の人たちといっしょに行ってきたものである。その中で安心できる場所をイメージして絵に描いてもらうということを行い、その形から居場所とはなんなのかを考えた。そのときに、お母さんのおなかの中にいるイメージ、母親の胎内にいる姿が究極の居場所なのではないか、もともとの拠点は親のいる場所だったのではないかということが考えられた。

●英語で居場所はmy place

居場所を英語でどういえばいいか考えて、単純だけども一番いいと思うのが my place である。そこでどこが自分の場所なのか考えてみると、家や学校、職場という大きな場所があるが、どうもそれだけでは足りなくなっているようである。

青年期の居場所の問題には、親が守ってくれる、頼りになるという存在から嫌悪する存在へと大きな転換がある。そのときに学校が居場所になればいいのだが、そうなりにくい状況である。

20歳の学生に「居場所と感じるところはどういうところですか。」ということを聞いた。いろんな声が出てきたのだが、分類すると

①一人で静かにいられる場所（そこにいるのが普通で自然な場所、安心できる場所、仮面をかぶらなくていい場所）

②意識・価値観の共有できる場所（共通項がある、仲間がいる、価値観が似ている）

③人と交わり、所属し、受け入れられると感じられる場所（社会的な居場所、自分が役立っていると感じる場所、認められている場所）

という3つのタイプの居場所があった。

●ネットワーク形成のために“ちっちゃな居場所”

づくりを

環境心理学で場所と環境というのをみると、生活領域、テリトリーとかなわばりというものがある。鮎などのなわばり意識は非常に強いことで知られているが、人間にも流動的だが存在する。基本的には住んでいる家のまわりにもっている。その中にいると安心するし、その人がその人らしくいられる。たとえば動物はなわばりから引き離されると途端に不安定になり、弱くなってしまう。

人間の場合はそれほど単純ではないが、高齢者の場合などは、引っ越しなどをすると機能が低下する、覚えていたことを思い出せないとといったことが起こる。それにあら意味深いのではないかと思う。人間の場合にはなわばりが1つではなく、家と学校、職場という2つの大きな拠点があってその周りにそこまで強くないけれども影響圏内のようななわばり領域を持っている。

アンカーポイントということをいっている地理学の先生がいるのだが、それは家や職場の周りの影響圏だけでなく、酒屋などの拠点とか散歩で行

く公園などのポイントがある、その周りにも行く場所があり、学校にいく途中にも何カ所か拠点を持っているということを言っている。これから社会とのネットワークを形成するためには、そのアンカーポイントになるような“ちっちゃな居場所”を家や学校、職場の周り、家と職場の移動途中にもどれだけ持っているかということが大切になってくる。

自分がそういう拠点を持っているか、といわれるとはなかなかない。九州大学のキャンパスの問題でもあって、大学の周りにそういうところがあまりない。いい大学というのはそういう拠点を持っている。

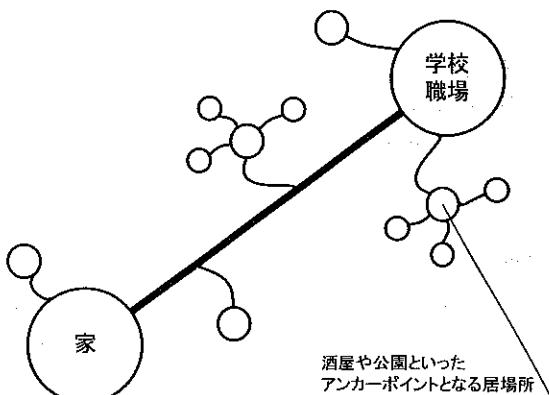
●子どもの居場所は、時間と空間と仲間の3つの間の一一致がポイント

子どもの居場所というのを10年ぐらい研究しているが、なぜ子どもの居場所が問題となるかというと、時間と場所と人がマッチしないからだ。学校から帰って2時間ぐらい時間があっても、そのときに外にでても友達がいるわけではない。時間と空間と仲間という3つの間が合わさったときに初めて居場所になる。今は、それがマッチしない状況になっている。一致する場所がどういうところになるかというと塾、駅、学校帰りなどになる。

そういうことから子どもたちが家に帰るまでの道草をみているのだが、なぜ道草が大事かというと上級生や下級生も混じっているからである。子どもの遊びで問題にされるのが、年齢の違う人と遊ばないということがいわれるが、問題は今そういう状況がないことである。そういうものが昔は自然と家のそばにあった。例えば、駄菓子屋やお店のおばちゃんが顔を覚えてくれていて、年長者としてしかってくれたり、親が言えないことをいつてくれたりした。

●街全体が道草の場、居場所にならないか

そういうことを学問的に見ているのだが、居場所の実践ということになるとなかなか難しい。前回の地域ゼミのチャドさんの取り組み（よかネット65号参照）は、学生の居場所を学校がつくってくれないから自分たちでつくったという例だろう。2つの大きな拠点、家と所属先をいたりきたりするのがきつすぎてシャットアウトしてしま



ちっちゃな居場所と大きな拠点のイメージ

い、登校拒否になってしまった場合にフリースクールという形で学校ではない居場所をつくっていたりしている例もある。それは一つの解決策ではあるけども、私はそうではなくて、街そのものが居場所になるべきではないかと考えている。かつて街は居場所であり、街のお店というのがその役割を果たしていた。

大きな目標に向かって、何かを成し遂げよう、業績を上げようというのは生活や社会のベースなのだが、ところどころに外れの部分があって、バランスをとっている。それがそぎ落とされたときに無理がきてしまう。そうならないための仕組みとして、少しつれられるような道草の場とか息抜きの場といったものがこれから必要である。

●個族には大きな拠点も必要だ

以上が南先生の話の大まかな内容である。その後、ゼミの参加者にそれぞれの居場所について聞いた。心の原風景が居場所になっていたり、子どもに干渉しすぎて子どもの居場所がなくなっているとか、家が居心地がいいからそれだけでいい、などいろいろな意見が出た。身近なテーマだけにいろいろな捉え方があると思うと同時に、居場所の問題は単純ではないなと感じた。

私自身は個族なので、道草というか仕事以外のよけいなことをたくさんすることでなんとか社会とのつながりを保っているように思う。ただ、その活動が多くなると今度は日常生活にしわ寄せがきてしまう。都会のひとり暮らしだとそのバランスが崩れたことになかなか気づかないし、指摘してくれる人がいない。やはり家族や地域の存在は大きいと改めて思った。

(ほんだ まさあき)

**井穴刺絡(せいいけつしらく)治療
取穴法の威力に感動
～健康支援ネット第3回セミナー報告～
山田 龍雄**

●毎回、ユニークなセミナーの開催

「健康支援ネット」代表の竹田さんの本職は土木設計コンサルタントである。彼の兄が歯科医師（歯科東洋医学会副理事）であり、周りに医療関係の知り合いも多く、本人も西洋医学以外の治療方法（代替医療）などに対して非常に興味があり、健康管理士という資格を取得している。

この「健康支援ネット」では、①代替療法を実践している先生方の講習会、体験・体感コーナー、自然食野菜等の料理教室の開催、②重い病気を患っている方に同じ病気を克服された人の話を聞いてもらい、病気に立ち向かう勇気と希望を与える、③個別に健康カウンセリングを行い、効果効用が高く、実績を上げている治療法や民間療法、健康食品の紹介、④一生飲み続ける薬、生活習慣病からの解放のお手伝いなどを目的とした活動をする予定であり、現在のところセミナー活動が中心である。これまで下記に示すように2回セミナーを実施しているが、両方とも私も初めて聞くものがほとんどであり、また実践的でもあり面白かった。

●人の神経は手と足の指先に集中している

去る10月10日（金曜日）の夜に3回目のセミナーがあった。この井穴刺絡治療という話は、事前に竹田さんから聞いていた。当日は若い人も数名来ていたが、そのほとんどが50～60歳代を中心で20数名参加されていた。

彼が言うには「長年、偏頭痛で苦しんでずっと薬を常用していた妻が、この治療をして治ったんですよ。それも指先に針を刺して少し血を

(健康支援ネット)

これまでの健康講座の内容

第1回：東洋医学は健康の宝庫

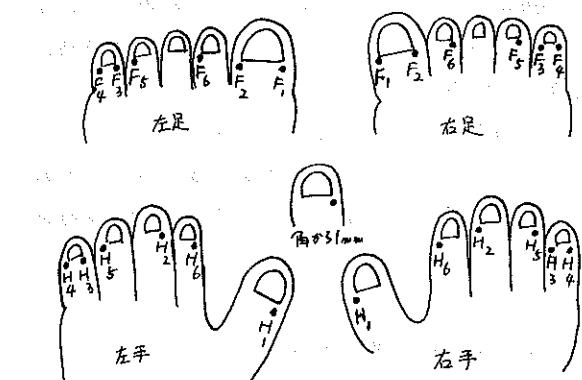
糖尿病の経験と現状

MMM体操の解説とガン体験

体験治療

第2回：色彩診断治療法の解説と

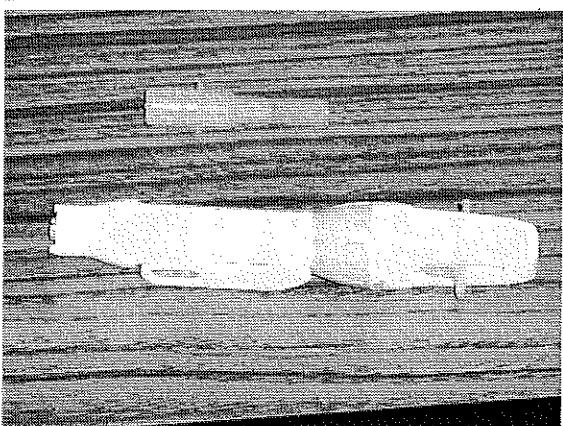
体験治療



井穴刺絡治療法による症状と指先との関係

出すだけです。私もこの治療をして、上がり続けていた高血圧から解放されました。」とのこと。本当に、こんな即効性があるものかという半信半疑の気持ちでセミナーを聞いてみたが、鍼灸師である稻舛先生はなかなか話も上手く、かつ理論的であって、改めて東洋医学の奥深さを知った。井穴とは、神経の末端という意味らしいが、漢和辞典でもともとの漢字の意味を調べると「井」とは、『地下水などの水脈がつながっている様子（広辞林）』、「穴」は『人体の急所』という意味もあることから、人間の体中に張り巡らされている神経網を水脈に喩えた意味ではないかと思う。また、「刺絡」とは人の動きを制御している神経系（経絡）に針を刺し、取穴（井穴から血を取ること）の意味である。

少し井穴刺絡の基本的な話をすると、人の神経は「交感神経」と「副交感神経」の2種類の神経が臓器、循環器、呼吸器などの動きをお互いに拮抗させ、バランスをとっている。たとえば緊張すると鼓動が高まり、喉が渴くというのは「交感神経」が興奮して起こる現象であり、寝るときには副交感神経が働いて、臓器の動きを抑制することで安眠できるという原理であるらしい。この両方の神経のバランスがおかしくなると、いろいろな症状が出る。かゆみ、喘息、花粉症などのアレルギー体質の人が睡眠時にひどくなったりするのは、抑制効果の役割である「副交感神経」が興奮することから発生するらしい。先祖代々、交感神経が興奮しやすいのか、副交感神経が興奮しやすいのかは決まっているので、自分の体質とどのようにつきあうかが肝



道具は、針(1本50円)、針を刺す機器の2つだけ、あと薬局で手に入られる消毒用アルコールとガーゼのみで自分でできる。

心なのである。「井穴刺絡治療」というのは、この交感神経と副交感神経によって生じる症状毎に、10頁の図に示す経絡の末端箇所である指先に針を刺して、血を取穴する方法なのである。

●治療効果があって収益効果があがらないが、お客様さんは途絶えることはない。

先生の話では、症状に応じ両手の指と両足の指のポイントに針を刺し、20～40回程度血を出すと、症状をやわらげられ、楽になるらしい。またこの治療方法は、効果があり、一度やり方とポイントを教えてもらうと患者自身でできることから、先生への収益効果は少ないらしい。しかし、先生は「治療効果が高いから、口コミで広まってくれれば患者さんには苦労しません」と言っていた。

この治療法を会得している人は、西日本で10人ぐらいらしく、四国からわざわざリューマチの治療で訪ねてくるおばあさんもいる。先生の話では、ガン末期などの病気やどうしても外科的な損傷のある病気以外ではほとんど、この治療法で改善が可能であるという。

●実践コーナーでは、手品師のような効果

先生の話のあと、期待していた実践コーナーとなつた。3人の方が実験台となつたが、この中に腕が腱鞘炎になって、手の平を下に曲げると腕に激しい痛みが走り、寝るときもつらいという人がいた。先生は、このような症状の患者さんを治した経験が大いにあったのであろう、自信満々という感じで指先のツボに何ヵ所か針を刺して血を出すと、実験台の方は、かなり痛



井穴から血を出している様子
みがなくなったのであろう、感嘆と喜びの表情を浮かべ感心されていた。

小生は今のところ、治したいところがないが、今後どこか治したいところが出来たら、是非、治療に行って先生から井穴のポイントを教わりたいものと思う。

この健康支援ネットにご興味のある方は、下記あてにご連絡ください。

(健康支援ネット)

第4回セミナーのご案内

テーマ

「私のガン克服法（食べ物で治す）」

講師：田中 浩

日時：平成15年11月29日午後3時～5時

場所：福岡県歯科医師会館第4会議室

(福岡市中央区大名1-12-43)

連絡先：TEL 092-722-0220

FAX 092-722-1391

代表竹田伸一（株）未来プラン

(やまだ たつお)

30年前から始まった
産山村田尻地区の民宿村

～口コミでじわじわと人気に～

愛甲 美帆

9月下旬、協同組合地域づくり九州の研修旅行で熊本県阿蘇郡産山村の民宿村に泊まった。この民宿村は今から30年前に地区の農家が一斉に始め、以来口コミでじわじわとお客様も広がり、今も5軒が営業している。「8軒が一斉に初めて今も続いている民宿」、「自慢の漬物が30種以上食べられる民宿」というウリは本当かどうか見に行つた。



食事処の欄間にには漬け物の名前がズラッと並んでいる。

●農家が始めた熊本県内でも古い民宿

大分県との県境にある産山村は、久重山と阿蘇外輪山の麓標高750mの高原地帯にある。宿は、池山水源（環境庁の名水100選）から約2kmの場所にあり、水源から流れ出る川沿いにある。その水で育った米が黄金に光る田んぼとスキ。案内板がなければ、ここに6軒の民宿があるとは気づかないような、のどかな農村風景の中に建っている。

この民宿村は、昭和47年に地元の農家の方々が一斉に立ち上げた。きっかけは昭和39年に大分県別府市の九州横断道路入口から湯布院町、久重を通って熊本県阿蘇郡一宮町を結ぶ幹線道路「やまなみハイウェイ」の全線開通による。

「すぐ近くの道を観光客が素通りしていく。近くには池山水源もあるのだからどうにかしてお客様を呼ぶことはできないか」ということで田尻地区の有志の方が呼びかけたところ12戸が賛同し、そのうち昭和47年に8戸が民宿としてオープンしたそうだ。現在は、5軒が営業している。

●お客さんが増えるとともに少しづつ広げてきた

当初からありのままにあるものを出すという方針で営業を続けられているそうだ。宿に入ると、少しづつ広げてこられたのかなという様子がうかがえる。私が泊まった部屋と他の人が泊まった部屋は増改築をすることもあって趣が違っていた。また、私たちが食事をした食事処は、昔から家族が団らんしていた民家の居間という雰囲気が残っていたが、それとは別に囲炉裏の食事処もある。

宿の人にお話を聞くと、「少しづつお客様が増えてきたのでここから先は増築しています。昔は鍵もなく、ふすま一枚を挟んで違うお客様が部屋を使ってましたが、近年はきちんと壁がある個室が良いという要望が多くなったので間に壁を



野沢菜浅漬、みょうがみそ漬などさまざまな漬物がある。つくって個室にしたんですよ」と言わされた。

お風呂は露天風呂と貸し切りにできる内湯があり、3年前に新設したそうだ。これは近くの温泉館から引いている。

●産山の自然が育んだお米がおいしくておかわり

食事の際は、名物の漬物が30種類ほど小鉢に並んでいる。赤牛、山女魚などボリューム満点の料理。なんといってもきれいな水が育んだお米がとてもおいしいとみんな口々に言っておかわりをしていた。デザートのおはぎ（ぼたもち）は小豆とお米のほのかな甘さがおいしくペロリと胃袋に入った。

グリーンツーリズムという言葉が出る以前から、地域で民宿を始めた田尻地区。リゾート開発、バブルの流れで身の丈以上の投資をすることなく、お客様は口コミでじわじわと広がってきたそうだ。設立当初からほとんどの宿が続いているのは農家民宿としてそこでとれたもの、あるものを大事にしてきたからだと思う。当日も若い人や中高年の夫婦グループと幅広い年代の人が泊まっていた。

(あいこうみほ)

所員近況

■宗像みあれ祭り“見”“聞”記

宗像大社のみあれ（御阿礼）神事を、十月一日に見に行ってきた。この日は、宗像大社の沖津宮（おきつみや）、中津宮（なかつみや）から神輿を辻津宮（へつみや）へ迎える行事である。この日は、日頃の漁業の安全と豊漁を願う漁師たちが、数百艘の漁船で沖津宮までお迎えに行く。その船を従えた巡幸が壯觀だというので、見に行ったの



3人の神職の方が先導する

である。

行ってみれば色々なことに気がつく。もともと私は、宗像大社とは旧玄海町にある「車のお払いをするところ」だけかと思っていたのだが、三宮を合わせて宗像大社と呼ぶらしい。なお沖津宮が本社とされている（角川地名辞典）。以上が“見”の巻。

“聞”の巻に移る。漁船を従えた御座船が二艘、沖津宮と中津宮から神輿をお運びし、港まで出迎えていた辺津宮の神輿と合わせて三体が浜辺に揃う。今度は担がれて、浜辺から近くの御旅所に向かう。その時神職三人が先導し、御旅所へ向かう。この時神様の動かれる音がする。（ここからはクルマにのって大社へ行かれるらしい。京都の葵祭りもみあれ祭りであるが、そちらは延々と行列をし、それで観光客を集めて稼いでいる）。

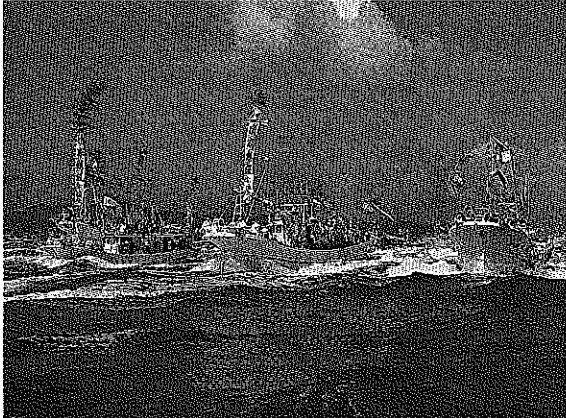
日本人にとって神様という存在は、非常に具体的な感じがする。建築工事などで、地鎮祭をするときに、「降神の儀」と神主が言って「オオ一一」と声を出すのがどういう意味なのか気になっていたが、ある時「ひょっとすると、これは神様の動かれるときの“音”ではないか」と思い当たった。その後何度も聞いたが、この認識が正しいかどうか確かめていない。ほかの宗教では、こんなことはどうなっているのだろうか。

みあれ祭りの時も、三人の神職のうちの二人が、「オオ一一」と言い続けていた。念のためもう一つつけ加えると、「みあれ」とは出現とか誕生を意味する言葉である。

次は“蛇足”。この五月に、長い間の念願であった「沖島」（おきのしまと読む）に行って来た。「おきのしま」というと島根県隠岐郡の隠岐諸島と思われるかもしれないが、そこは「隠岐国」で



沖津宮、中津宮、辺津宮の順序で御輿が移動する



今年は300船余だったという、このような漁船

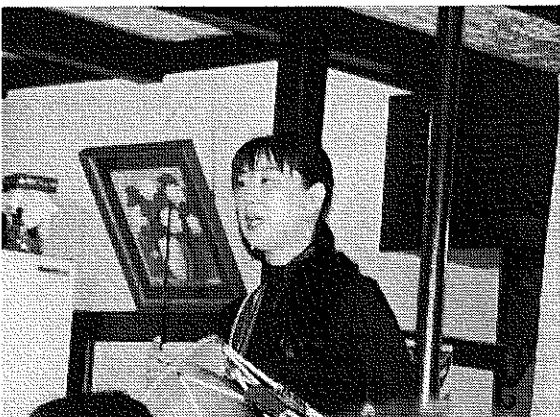
あり、百科事典にも「おきのくに」と出ている。「おきのしま」で出てくるのは宗像郡大島町に属する「沖島」である。記事には、膨大な祭祀遺跡や「海の正倉院」といわれるぐらいの国宝の話が出てくる。ここは周囲4.5キロの小さい島であるが、全島神域であり、上陸の際は素っ裸で禊ぎをしなければならない。もちろん私も禊ぎをしてお参りした。第二次大戦の時には、「陸・海軍施設を建設し、数百人の兵が駐屯したが、この時も信仰上の慣習は守られた」（角川地名辞典）ということである。

（糸乘 貞喜）

■李政美(いじょんみ)さんの居酒屋コンサート

～ここにも追っかけおばさん族がいた～

李政美さんは在日韓国人二世で、一時期国立音大でクラシックを目指していたが、ポピュラー音楽の方に転向し、今、全国の市町村主催のコンサートなどを中心に活動している。李政美さんの歌は、韓国語のものもあるが、ほとんどは日本語で歌詞もわかりやすく、彼女のクラシックで鍛えた声量と澄んだ歌声は曲と合って、なかなかいい。彼女の歌の中では、金子みすずの「みんな違って、みんないい」というフレー



李政美さんのコンサート風景

ズで有名な「小鳥と鈴と私」、中原中也の「湖上」、宮沢賢治の「星めぐりのうた」など、過去の著名な詩人の詩に曲をつけていているものもある。

歌の説明を文章で長々説明してもしかたないので、興味ある方は、是非聞いてみていただきたい。まだ、メジャーではないので一般のCD店では販売されておらず、インターネットで検索し、事務所の方に連絡すると郵送してくれる。

10月5日（日曜日）に博多区清川3丁目にある居酒屋でのコンサートのお誘いを受けたので、聞きにいってきた。

居酒屋は、4人掛けのテーブルが6脚程度しかおけないようなスペースのところであったが、当日はテーブルも片付けられて、40名程度のファンが集まっていた。年齢は40～50歳代がほとんどで、女性が7割程度であった。

歌が始まる前に、自称「李政美さんを応援する会」というグループ代表の方が挨拶された。この挨拶の中で驚いたのが、なんと東京、京都、大阪からのファンも来ているということであった。このような内輪のコンサートであったからこそ、わざわざ博多まで追っかけてきたものと思われるが、つくづく今の40～50歳代の女性パワーには感心させられる。（追っかけが女性であるということは、話をして確かめていないが、コンサート終了後に熱心に李政美さんと一緒に写真を撮っていたのは女性たちだけであった。）

月間「文藝春秋」10月号の中にも「日本おばさん族の研究～なぜ「おばさん」は水川きよしにはまるのか～」という取材記事が掲載され

ていたが、追っかけ費用に年間2百万円をかけている人もいるらしく、道楽を超えて「追っかけ」が人生そのものであるということであるらしい。李政美ファンと水川きよしファンの質は、多少異なるけれども、「追っかけ」という面をとらえると、その本質は変わらない。

子育ても終えて、少し遊ぶ余裕のお金も蓄えている「T (TIME: 時間)・M (MONEY: 時間) 余裕世代」が、これからますます増えてくることを考えると、これからのまちづくりは、これらの人たちのニードを無視できないことを改めて実感したコンサートでもあった。

（山田 龍雄）

お着物とともに季節を楽しむ

今年3月からほぼ2ヶ月に1回のペースで開催されている「お着楽俱楽部」に参加している。この「お着楽俱楽部」はモンブラン俱楽部（よかネットNo.58参照）で行われているもので、先生の熊谷絵津子さんは本業であるライターの仕事の傍ら、個人的に依頼を受けて着物の着付けをされている。モンブラン俱楽部のお客の中に着物の着付けを習いたいという人がいたこと（私もその1人である）、熊谷さんからママにいろんな人に着物に親しんでもらいたいという話があったことがきっかけとなって実現したものである。

「お着楽俱楽部」では毎回、季節に応じた着物の着付けを熊谷さんに教えてもらい、その後で日本の四季折々の行事や着物について熊谷さんにお話をしてもらうという構成になっている。七夕飾りをみんなで作ったり、お抹茶をみんなで飲んだりなど、ただ着付けの勉強をするだけではないというのが参加するまでの1つの楽しみでもある。

着付けの練習に使う着物はすべて熊谷さんの私物。それも決して高価なものではなく、呉服店の閉店セールや質流れで手に入れたというものが多そうだ。「これは質流れで10円で買った」というものもあり、どんなところで着物を買ってきていたのかという話を聞くだけでも本当に楽しい。私もそんな戦利品の中から、浴衣をとても安く譲ってもらって夏に何度も袖を通した。

着物の着付けを習い始めると、家でも練習がしたいと思うようになった。何とか安く着物が手に入らないだろうかと思っていたら、9月の「お着



着物教室の様子

「楽具樂部」で質屋さんにショッピングに行くことになった。安いものなら1,000円で手に入るという。気に入ったものがあったら買おうかなあという軽い気持ちで連れていってもらった。

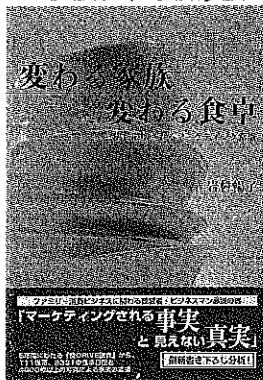
質屋さんに到着すると既に多くのお客様がいた。着物を買いに来ている人はもちろん、パッチワークなどに使う布を安く調達するために来ている人もいるとか。そこではゴミ袋サイズの透明な袋が買い物かご。みんな気に入ったものがあると片つ端から袋の中に詰め込んでいく。最初はその

勢いに押されていたのだが、せっかく来たのだから何かいいものを見つけて帰ろうと思い、デザインと値段を見ながら何着かを選んだ。

実際鏡の前であわせてみると、いくら気に入ったデザインでも自分にあわないものもある。また、古着なので桁幅が短くて断念したものもあった。結局、熊谷さんにアドバイスをしてもらい、着物を3,000円、帯を1,000円で購入した。着物を購入した日はもちろん、その後も家で着物と格闘している。「お着楽俱樂部」で教えてもらっているときは自分でも何とか着られそうと思ってしまうが、やはりそう甘くはない。ああでもない、こうでもないと一人ごとを言いながら、そんな着付けの練習を楽しんでいる。

10月10日にはオプション企画のお月見会があった。その日はきちんと熊谷さんに着付けてもらつて、望遠鏡で満月を見たり、お団子を食べたりというひとときを過ごした。今年になって季節を感じる催しのときはいつも着物を着ている気がする。いつかちゃんと自分で着物が着られる日が来るよう、練習に励みたいものである。（梶原 里香）

翻“個族化する核家族”を食卓から見つめる



『変わる家族 変わる食卓』

岩村暢子著
勁草書房刊

大変な本である。たとえば第四章の『個化する家族たち』には、核家族が個化している様子が出ていている。「ある家庭の（主婦39歳）の平日の朝食。夫は七時に毎朝お決まりの八枚切りトーストとインスタントコーヒーの朝食を食べている。ほぼ同時刻に義父・義母も食卓につくが、義父は六枚切りの角食パンにジャムとミルク、毎朝必ずバナナを要求する。義母は山形食パンにこだわり、これを焼いてからハムを挟んでコーヒーで食べるのがいいと言う。七時十分から断続的に子どもたち三人が食卓につくが、長男はピザトーストにヨーグルトと麦茶、次男はインスタントラーメンを食

べたいと言つて……」といった文章が続く。読み出して、はじめのうちは「本当かなあ」とか「まさか」という感じだったが、よく考えて自分の周辺を見回してみると、納得がいく状況である。

この本は、「1960年以降生まれの主婦を対象にした家庭の2,331の食卓調査をまとめたものである。その調査方法は徹底している。第一ステップでは、食事作りや食生活、食卓に関する意識や実態などについて、質問紙法で尋ね回収する。第二ステップでは、一日三食一週間分連続で、毎日の食卓に載ったものについて、使用食材の入手経路やメニュー決定理由、作り方、食べ方、食べた人、食べた時間などを日記と写真で記録してもらう。第三ステップでは、第一ステップの回答と、第二ステップの日記と写真の記録を突き合わせて分析・検討した後、矛盾点や疑問点を中心に背景や理由を細かく聞く詳細面接を行う」というような面倒な仕事から生まれた“現代の家族と食卓”的実態及び分析レポートである。このような面倒な調査が、1998年8月、99年11月、2000年11月、01年11月、02年9月にわたって5回行われている。調査票の書き方から、それをもとにした詳細面接のチ

エックも厳しい。

私どもが以前に、生活ゴミ調査をした時、「賞味期限がゴミ起源」という言葉が出てきた。現代の主婦たちも、「商品の表示や広告などで『言っていること』や『書いてあること』を絶対視したり、自らの考え方、判断より『書いてあること』に従って行動する」ようになっている。たとえば「『カルシウムたっぷり』とか『ビタミン入り』などと書いてあると『よいもの』だと思う」らしい。「1960年代以降生まれの主婦は、『自分の感覚で判断するなんて、そんな『いい加減なこと』はできない』、『『自分の感覚や考えによって行動する』ことは『いい加減なこと』『危険なこと』、それよりは『書いてあることに従うべきだ』とする考えが共通して認められる』時代なのである。

本書にも「情報化時代が始まった1960年以降に子育てをした（彼女たちの）親世代もまた、『みなさんどうしているの？』『フツーどうするの？』『どうするのが一般的なの？』と情報指向、

編集後記

■九州大学学術研究都市づくりの参考とするためにスコットランドとベルギーの産学連携のしくみを視察してきました。ベルギーといえばベルギーワッフルだと短絡的に考えるわけですが、ベルギーに住む人にとってどれくらい一般的なのだろうかと非常に気になっていました。

結果、どこの地下鉄の駅にもワッフルのお店があり、アイスクリーム屋にもおいてあれば、たこ焼き屋さんのようなスタイルのお店もあります。スーパーでは10個入りや20個入りのものまで売っていました。ベルギーの文化なのかなあと感じた次第です。
(ほ)

■9月に北京に行きました。昨年、モンゴルの帰りに寄って以来でしたが、街がだんだんきれいになっています。オリンピックのために、古くから残っていた街並みが再開発で壊されていくのを嘆いている人もいます。建築ラッシュは、住宅供給も含め不動産の相場を押し上げているようです。土地活用の需要が旺盛とはいえ、なんでもかんでも都市に集中させることができのかどうか、と余計な心配をしてしまいました。
(べ)

外部標準指向であったのだと思う」と書かれているが、確かにこの本に書かれていたことは、私たちの世代から始まっていたのだと思う。

この本を読んでいて強く感じたことは、現代の家庭は“規格主義”“平均主義”“効率主義”であり、「外向きアンテナの家族」になっていることである。これは“工業社会の規範”である。これらの家族の団らんの場であるファミリーレストランも、最も工業化されたサービス業である。

現在私は、“個族化社会”について考えている。この本も、そのこととの関わりで読んだ。「個化する家族たち」の本を読みながら、これらの、最も工業化された家庭で育つ若い人たちは、“脱工業化社会”だと、 “独創の時代”などという社会で生きて行かねばならないということが気になつた。社会性が弱まり、個族化が進む十年後の社会はどんな社会なのだろうか？その時代の社会的安定を、少しでも強める地域政策はどのようなことなのだろうか。
(糸乘 貞喜)

第74回地域ゼミのご案内

「地域にあった自然林の再生」を考える

講 師：高田 研一さん

日 時：平成15年11月20日（木曜日）

18:30～20:00

場 所：(株)よかネット 会議室

参加費：500円

連絡先：(株)よかネット（愛甲、山田）

よかネット No. 66 2003. 11

（編集・発行）

(株)よかネット

〒810-0001 福岡市中央区天神1-15-35 ホンダハピエ5F

TEL 092-731-7671 FAX 092-731-7673

<http://www.yokanet.com>

mail:info@yokanet.com

（ネットワーク会社）

(株)地域計画建築研究所

本社 京都事務所

TEL 075-221-5132

大阪事務所

TEL 06-6942-5732

東京事務所

TEL 042-501-5231

名古屋事務所

TEL 052-265-2401

(株)地域計画・名古屋